

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	DAMASO FERREIRO POSSE
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 芥川龍之介における西洋古典の受容—「神神の微笑」と「文芸的な、余りに文芸的な」を中心に			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授 河西 英通		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 溝淵 園子		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 有元 伸子		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授 赤井 清晃		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	総合科学研究科	准教授 柳瀬 善治	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、芥川龍之介作品の精読を通して、①芥川文学において西洋古典が果たしている役割、②西洋古典のモチーフとしての扱い方、③その扱い方から見える芥川の西洋古典の知識の深さ、の三点を解明することを目的としている。なお、背景として①明治・大正期における西洋古典の浸透度、②18・19世紀のヨーロッパ文学における西洋古典の役割、に言及している点は、本論文がケーススタディではなく、普遍的なテーマへのアプローチを自覚していることを示している。</p> <p>第一章「序論」では、国内外の先行研究を検討することを通して、西洋とは何か、西洋古典とはなにかを論じたうえで、日本文学と西洋古典文学の比較研究（比較古典文学）の意義と射程を明らかにし、芥川作品の中の「神神の微笑」と「文芸的な、余りに文芸的な」の二作品の取り上げる意味を論ずる。</p> <p>第二章「明治・大正時代における西洋古典」では、『芥川龍之介文庫目録』を手掛かりに日本近代文学館所蔵芥川文庫の西洋古典文献の調査を通して、明治・大正時代の西洋古典文学の導入・翻訳状況、西洋古典文学の普及における欧米近代文学の媒体としての役割を明らかにしている。また背景として、明治初期から始まった日本の古代芸術における古代ギリシャの芸術の影響（法隆寺のエンタシス）にも着目している。</p> <p>第三章「「神神の微笑」における西洋古典」では、文芸作品の視点から西洋古典のモチーフのあり方をとりあげ、①西洋古典「Bacchanalia」、「百合若伝説」、古代ギリシャの神々の関係性についての考察、②芥川作品の主題である、神々の復活とキリスト教への反発の意味および位置付けの明確化、③ハイネ「流刑の神々」と「神神の微笑」の比較分析を通して、芥川の独創性の抽出、を行っている。</p> <p>第四章「「文芸的な、余りに文芸的な」における西洋古典」では、評論作品の視点から西洋古典のモチーフのあり方をとりあげ、①芥川の芸術論と新プラトン主義の関係性についての考察、②芥川芸術論を形成する要素としての新プラトン主義の分析、③芥川の文学思想におけるニーチェの「アポロ・ディオニュソス論」の影響の検討、④芥川の晩年における身体美論と古代ギリシャ彫刻の関連性の検討、を行っている。</p> <p>第五章「結論」では、文芸的および評論的な視点から分析された芥川文学の西洋古典のモチーフの実態をまとめるとともに、日本近代文学に西洋古典が及ぼした影響・衝撃の大きさに言及している。</p>			

審査会において、本論文がきわめてハイレベルな学位請求論文であることが一致して確認された。とくに序論における課題設定の高さ、先行研究批判の鋭さ、分析方法の的確さは刮目すべきものであり、第三章におけるハイネ「流刑の神々」と「神神の微笑」の比較分析は本論文の白眉というべき優れたものである。多言語を駆使した著者の研究は、今後、芥川文学を、諸ジャンルを往還する脱領域的な運動として捉えることを可能にするだろうし、また文体論・比較文明論へ展開していく可能性も秘めている。さらに芥川文学の中に西洋古典を経由したうでのラジカリズム（表象批判・社会批判）を見出すならば、芥川文学に新たな世界文学性、あるいは〈革命〉性を探ることが可能となろう。筆者の今後の精進が大いに期待される。

問題点として、①より体系的総合的な芥川文学論の中で本テーマを論ずる必要性、②多言語使用の研究論文における翻訳の問題、などが残るが、筆者がそれを乗り越えて、今後の日本文学研究を大きく飛躍させていくことを予感させる研究といえよう。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)